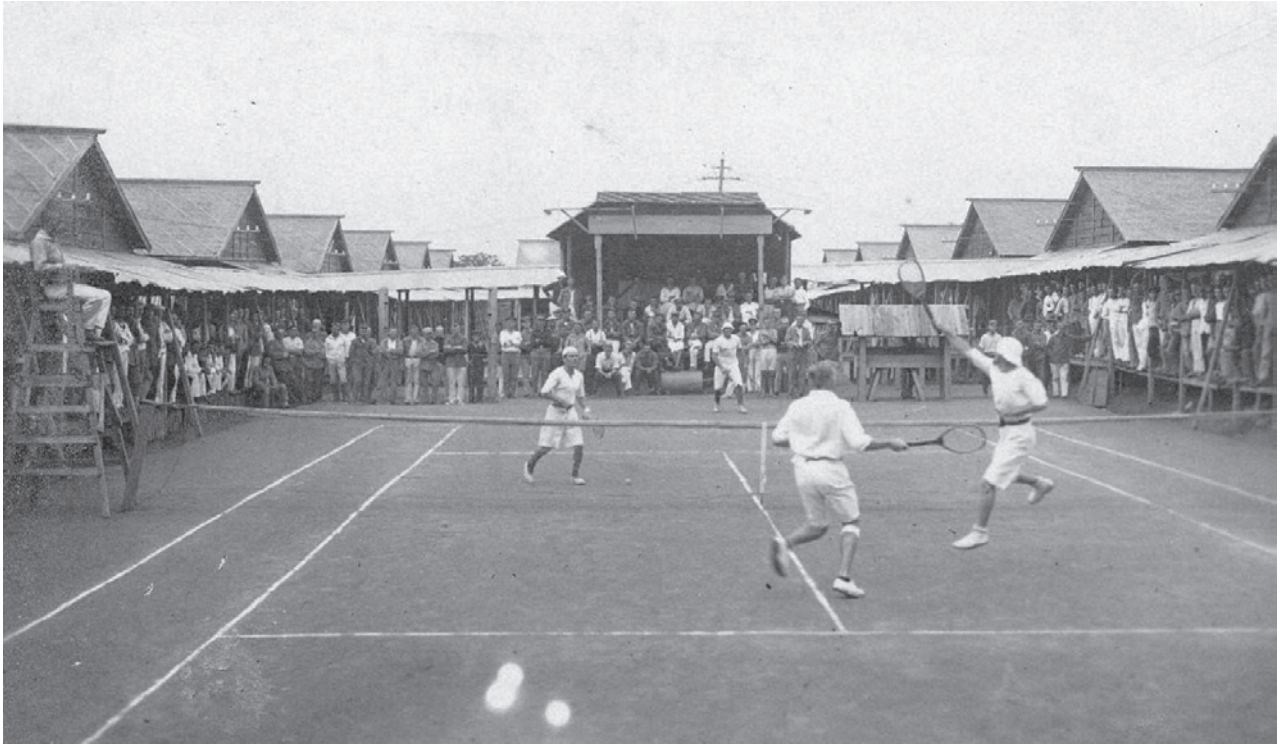
ドイツさんと久留米 第５回

ドイツさんの文化スポーツ活動



仲間が固唾をのんで見守る中、ナイスボレー！（以下、写真は全て久留米市教育委員会所蔵）

・初めて見た近代スポーツ

「確か（国分尋常高等小学校）３～４年生の頃、先生が引率して学校から収容所へ行きました。ドイツ人は体操が上手とのことで見学に行ったのだったと思います。収容所内をみんなで見学した後、俘虜が鉄棒をするのを見ました。特に大車輪を見たのは初めてで、あまりの上手さにビックリしたのを今でもよく覚えています。」（市民の証言）

捕虜たちにとって、その無聊を解消し心身の健康を維持するために、スポーツは遠足と並んで大変人気がありました。分散収容されていた当初から、ボールを蹴ったりテニスをしたり。国分村の久留米収容所に統合されてからは、組織的にスポーツ活動が行われるようになりました。体操やテニス、サッカー、ホッケーなど、これらは全て本格的なヨーロッパの近代競技です。

収容所内では月間スポーツ情報誌が発行され、捕虜による運動管理委員会が自主運営、13 のスポーツクラブに練習時間を割り当てるという熱の入れようでした。大正６年（1917）と同８年 10 月には、それぞれ約一週間にわたる大規模なスポーツ大会が開催されます。走り幅跳びや砲丸投げ、走り幅跳び、棒高跳び、100m走、５km走、ハードル走、リレーなどの陸上競技、先ほどの各種球技、レスリングや綱引きに加えて、夜には音楽コンサートや演劇までプログラムに組み込まれる一大イベントでした。

勢ぞろいしたフットボールチームのメンバー

そんな彼らの熱心なスポーツ活動を目の当たりにして、政府の俘虜情報局は次のように感嘆しています。

「実に彼ら捕虜の運動習慣と読書習慣とは、その国民性の長所ともいうべき美点である。日本人がお手本として学ぶべきことだ。」（「俘虜収容所情況ノ件報告」を現代語訳）

近郊の子供たちにとっても、捕虜たちのスポーツ活動は、ちょっとした楽しみでありました。

「俘虜が収容所内でボール蹴り（サッカー？）をしており、塀の外からも高く上がるボールがよく見えました。たまに、ボールが塀の外に出ることがあり、衛兵付きでボールを探しに来たドイツ人に拾ったボールを探すと５銭くれました。」（市民の証言）

ドイツさんたちは、サッカーやテニスボールを拾ってくれた子どもたちや村人に、「ありがとう」と丁寧にお礼を言ったといい、その紳士的な態度も好感を持たれていたようです。

・本格的な演劇活動

大正８年（1919）12 月 19 ～ 21 日の３日間、市内恵比須座（注１）で「独逸（ドイツ）人演芸会」が開催されました。愛国婦人会幹事部が事務局となり、捕虜たちに依頼して実現した本格的な演劇・音楽・バラエティーショーの公演でした。舞台の背景などすべての道具類は捕虜の作品、劇場の賃借料は入場料で賄いました。公演は関係者向けの限定的なものでしたが、連日満員で大盛況だったようです。地元紙は「喝采鳴りも止まず」と伝えています。まさしく、「芸術には国境がない」（「演芸会開催趣旨」より）のです。

演者は全て男性だが、本格的な演劇

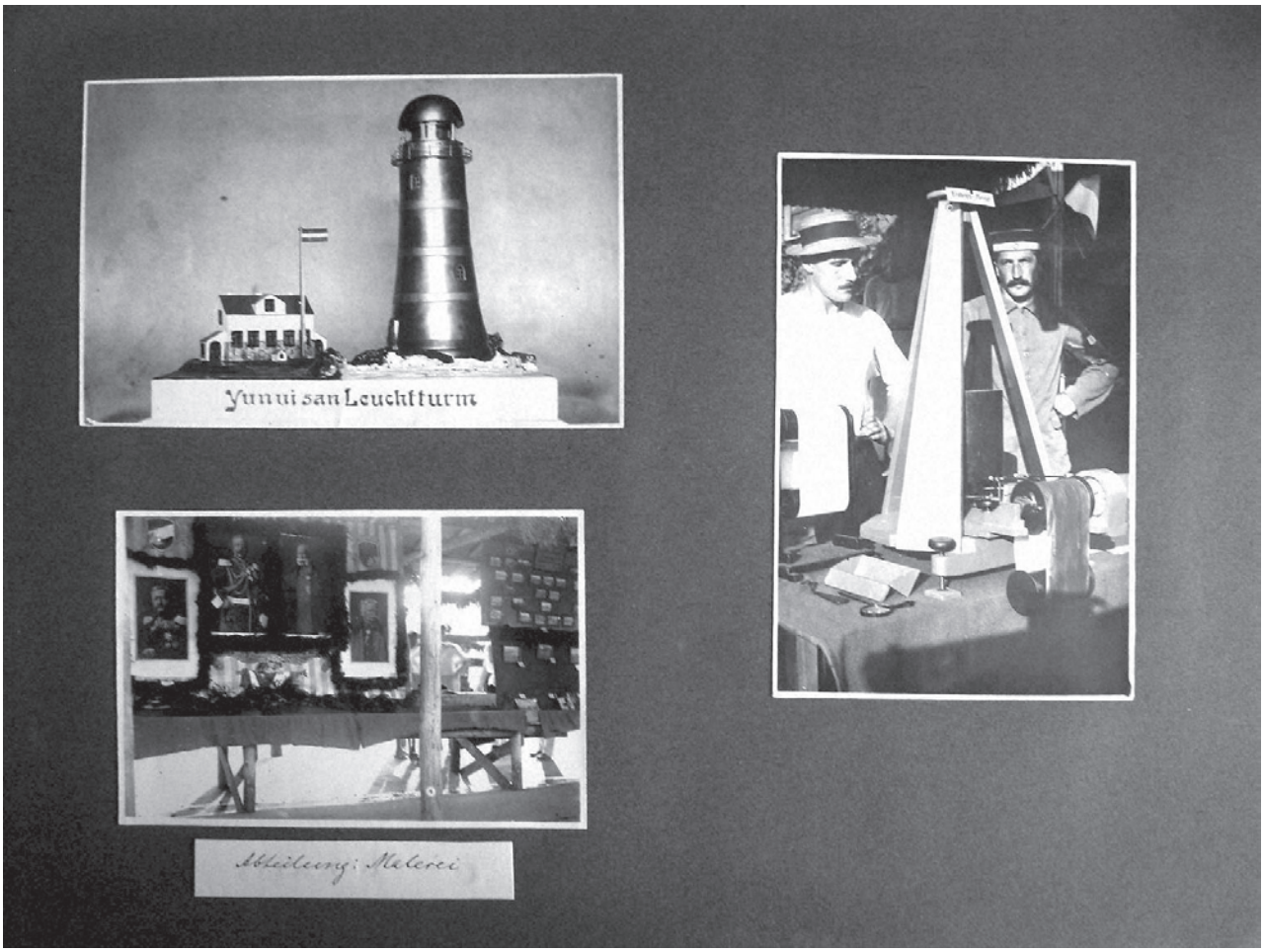
「我々『芸術家』は、役者や女優や期待いっぱいの聴衆など、いろいろな人々と触れ合えて、とても愉快だった。聴衆と役者はかなり親密で、見物人が好奇心を抑えきれなくなるとカーテンの下から舞台に潜り込んで、しばらく口と鼻を抑えて見つめると、また満足して自分の席に帰っていった。その『席』というのは、たいてい小さな所帯とでもいうものであった。客席は畳が敷いてあり、聴衆はそこに座った。足の高さほどの四角い舛で空間を囲み、その一つ一つに６人の大人が座った。大概さらに数人の子供がいて、臆さずに乳を飲んでいるのもいたし、叫び声を上げる子供もいた。それからあちこちに火鉢があって、お弁当一揃いなど、６時間から８時間の観劇に必要なものが揃っていた。」

（「エルンスト・クルーゲの日記」生熊文抄訳）

捕虜たちは、収容所の開所から 10 か月後の大正 4（1915）8 月に第 1 回公演を行って以降、全国の収容所トップの 56 回 60 作品を上演しました。その約 78%が笑劇や喜劇といった、皆で笑って楽しめる演目でした。演劇の作者は多彩で著名な作品が多いようですが、捕虜が創作したものもあります。なお、女性役はほとんど固定的で、カツラやメイク、女性ものの衣装を着て熱演する捕虜の写真がドイツ歴史博物館に残されています。

・美術工芸展の開催

捕虜たちは無聊を和らげ心身の健康を保つために様々な活動を行いました。美術工芸品の製作もその一環です。その作品発表会が 3 回開かれています。中でも大規模だったのは、大正 7 年（1918）11 月 29 日～ 12 月 5 日にかけて収容所内で開催された第 3 回久留米美術工芸品展会で、期間中には演劇・音楽・運動競技も行われるという総合文化祭でした。



美術工芸品展の作品

出品作品数は約 500 点。彫刻、金属製作品、象形美術、玩具、写真、詩歌の 5 部構成で、宝石箱やタバコ入れ・筆記用具・ティーセットなどの雑貨類から、タービン・電話装置などの工芸品、水彩画・油絵・鉛筆画などの絵画、気象学統計などの学術研究作品まで多彩な内容でした。展示品は即売や予約販売も行われ、うち 3 割強の作品が売れたようです。日本人の観覧日も設定され、軍関係者や地方官吏、学校職員や地方有力者や工業系の学校へ観覧券が送付されました。最終日の午後には、地元の中学校と商業学校生徒 480 人が観覧に訪れました。さて、明善中学 4・5 年生の感想は…。

「ドイツ人は科学的知識が豊富で、その応用の才に富んでいる」「頭脳が緻密」「技巧が繊細で卓越している」「不撓（ぎょう）不屈の忍耐力を持っている」「学究心が旺盛」

以上のように、日常的にスポーツや文化的活動を行うこと自体が、ドイツ人にとっては極めて自然で当たり前のことでした。ドイツ捕虜の演劇活動を研究される津村正樹さんは「まさに、その国の文化の厚みとでも言えるものではなかろうか」と言います。「ドイツに学ぼう」。その神髄を目の当たりにした市民にも、大きな印象を残したようです。

（注 1）明治 44 年（1911）、旧小頭町一丁目で開業の大劇場。収容人数は 1,177 人。

企画制作　久留米市 市民文化部文化財保護課・総合政策部広報戦略課
令和元年（2019）11 月 29日　発行